

高齢者大学文芸部 3月歌会

天満宮囲むがごとく家々の白梅匂ふ北宮の里
北村 玉恵
啓蟄を待たず飛び来る虫一つ夜の灯りの温かき部
山城 雅子
老いたれど良き友多く連れ立ちて今宵一泊杖立の
湯に 今坂 文子
トゥーランドットのリズムに乗れる荒川静香神の
技かとテレビに視入る 山代 静子
初曾孫しばし見ぬ間に離乳食口開きつつテーブル
叩く 中村 トメ
老夫の動作鈍きに胸痛む長き歳月家族守り来て
佐々木佐江子
幸せはこんな処に。息子より「腰は良かね」と問
はれし朝 山田 弘子
気になりし子犬の里親決まりたり今夜の眠り安ら
かなりや 宮本 幸子
九十のわが誕生日に花抱き祝ひてくれしデイケア
の人 荒木 幸
遠き日に友に賜びたる紙雛小さきを飾りひとりの
節句 梅野かをり

万句の里俳句会 2月句会

煙立てつつ耕してゐるひとり 北村 君子
梅の香のほのかに動き始めけり 丸山美代子
麦を踏む夫婦二人の影連れて 岩木 敬治
加齢とは何時のまに來し山笑ふ 打出 貞
水音のみきこえし春の山路かな 野中 公枝
つまづくな子の一言に冴返る 隈部 輝子
父の忌の面影偲ぶ梅白し 田島 房子
盆梅の苔零る、ばかりなり 加藤 妙子
焼かれる日待ちてゐるかに大枯野 北村 妙子
風やみて野に透きとほる初音かな 平山 邦子
ひたすらに人待つごとく梅待てり 宮本 雅子
谷間に妖艶招く紅椿 林 まつ子

肥後狂句桜会 2月例会

新しもん 媽より車大事さす 高倉 新米
用心深き 婚約してもキッスだけ 窪田 明徳
若つかなあときめく心持つとらす 高木 房恵
今年こそ拉致に結末つけてくれ 安武 二山
不意の客 家びつしやいだ雪女 東 栄次

泗水短歌会 2月詠草

用心深き保証人には立たつきん 田尻 浩風
玉に暇母乳の出らんFカップ 太田 雄三
不意の客 新婚さんが大慌て 小川 繁美
玉に暇 屁理屈ばかり押し通す 北村 竹刀
用心深き マスク越しキッスしよらす 光堀 善教
若つかなあ 寄ると触るとあの話 狩野 本六
玉に暇 シャンだけど愛嬌の無ア 須藤 新生
酷寒にシンピジュームの十鉢枯れ花への未練すば
り断ち切る 大島 ひと
音なくただ寒月の光射す未生のわれのごとき細影
長尾はるみ
電線に夕べを騒ぐ鳥の群鳥語が分かれれば楽しかる
平嶋きくえ
べし
なみなみと湛うる湧で湯に手足伸べ一人自在の思
いめぐらす 古田のぶ子
庭隅のうらなり南瓜の味やよし寒に向いて身をば
増田久美子
養なう
雪空の緩みて明るむ朝空に雲雀の声の湧き出し渡
る 吉安 永子

せせらぎ俳句会 2月例会

群がりて狭庭占める貝母の芽 内村 鈴子
母の顔偲びつ活くる水仙花 服部 静子
二人して目当てそれぞれ植木市 藤本アツ子
臥せば娘にすべてをゆだね春時雨 坂本まつえ
踏むまじき宮のきざはしの落椿 寺本 和子
後三日だけの二月のカレンダー 吉岡 民子
米黒野の暮れ初む阿蘇を下りけり 藤本 邦治
日脚伸ぶ草潜りゆく水の音 五丁 義昭
涅槃西風我れには浄土の風ならず 内村 泊虹
夫なさば語りたき日々梅ふふむ 村山 数恵

七城短歌会 2月詠草

眠られん 単車は起きてさろきよる 好 茶
病み上り 告知できんで隠しとる 美 由
病み上り シャツもズボンも太うなった 江 彩
若作り 釣り合う取らん顔と服 五 女
病み上り 鍛え直さす足と腰 水 光
しゃまぎつて 得知れん料理しなしとる 英 坊

旭志文芸俳句会 2月詠草

水色のカーテンさつと展ぐごと芽生えの季か立春
すぎて 斉藤 芳子
韓国のイルミネーションに驚嘆し吾車中より 緒方 寛子
シャツターをきる
菊まつり終りて菊花疲れおり 岩根サチ子
足跡に氷はりたる峽菊田 芹川のり子
霜月や亡夫恋う想い募り来て 東 芳子
遠望に風車まわりて冬あかね 水谷 ミネ
里小春曲玉磨く古代びと 芹川 蓉子
故里の氷柱下り小川道 郷 ミヤ子
つるべ落し今日の小春日もえつくし 出田みどり
寒波来て地鳴りに似たり風の音 中山 栄子
海苔竹も視界に収め幾千鳥 中尾ヨシコ
化粧水心地よき春の陽射しあり 岩根 良子

肥後狂句水笑会 2月例会

眠られん メダル逃した悔しきで 三水
しゃまぎつて さつさと先に帰えらした 乗 仏
病み上り 良か体型になつたたい 三 代
眠られん 寝酒のちつと足らじやつた 左 党
庭掃除ばら捲いた豆拾わなん 梅 月
病み上り 洗濯板のごたる胸 千 笑

おわびと訂正

3月1日号に一部誤りがありました。おわびして訂正します。
12ページ広報文芸きくち「泗水短歌会」右から4句目。
(誤)
戸障子を開くれば一面墨絵音なき視野に牡丹雪舞う 福原美智子
(正)
戸障子を開くれば一面墨絵音なき視野に牡丹雪舞う 福原美智子